

リカバリサポート・ネットワークが09年度報告書をまとめる

相談件数は過去最多の1305件 新規相談者の多さが改めて浮き彫りに

問題を抱える当事者、20代が増加傾向に
高額利用者も依然として多い現実

きちんと依存問題に関する電話相談機関である特定非営利活動法人「リカバリサポート・ネットワーク」(RSN)はこのほど、2009年度の電話相談活動についての報告書をまとめた。それによると、09年4月1日から今年3月31日までの1年の間に、06年の開設以来、過去最多となる1305件の相談が寄せられたことが分かった。

前年度の1187件と比較すると約10%の増加で、1カ月の平均相談件数は108.8件にも上った。また、RSNに初めて電話相談をする「初回相談」の割合が全体の88%(1149件)を占めるなど、相談件数の伸びとともに新規相談者の多さが改めて浮き彫りとなった。

コーラー(電話相談をしてきた人の詳細については、全相談件数1305件のうち、問題を持つ本人からの相談が825件(63%)あった。家族・

友人からの相談は338件(26%)で、その内訳は妻の立場が最も多く121件、次いで母親の立場が95件、子ども

の立場が32件と続いている。エリア別では神奈川県が90件が最も多く、次いで東京都の87件、沖縄県の71件(表1)。一方で、まったく相談がなかったのは福井県、1件のみは島根県という結果も出ているが、このエリア別の相談件数の数字と、実際にのめりこみの問題を持つ人がいるエリア別の数字は、当然のことながら一致するものではないと報告書では記している。

次に、コーラーではなく、実際に問題を持っている本人の詳細をみてみると、1305件のうち男性855件(65%)、女性309件(24%)で、年齢別では30代が373件で最も多く、次いで40代247件、20代240件となった。30代を中心に問題が起こっていることが伺えるが、ここ最近の傾向は、20代の数が他の年代と比べ大きく伸びている(08年度比46件増)ことが特徴で、わずかではあるが問題を抱え

る当事者の若年化が進んでいる傾向が読みとれる。

遊技の頻度と金額については、今年1月から3月までの3カ月のデータに基づいたものであるため、09年度を反映したものとはいえないが、最新の資料として参考になる点はいらう。なお、この2つのデータの総相談件数は211件となっている。

「1週間に遊技する頻度」で最も多かったのは「ほぼ毎日」の97件(表2)で、「1カ月に使う金額」は「5万円未満」と「5〜10万円未満」が48件でトップだった(表3)。

注目すべきは高額利用者の多さだ。表3を見ると分かるが、5万円以上使う層が全体の7割を占め、さらに、最高額に属する「20万円以上」が2割弱(34件)を占めた。高額利用者からは「お金を持つとあるだけ使ってしまう」「借金も多く、負けを取り返したくて多くの額を使ってしまう」といった、事態の深刻さを再認識させられる相談が寄せられたという。

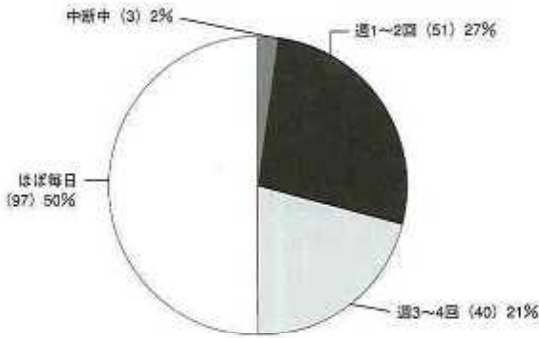
■都道府県別相談件数 上位10件(表1)

	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	総計
1位	沖 縄 104	大 阪 93	神奈川 90	神奈川 90	沖 縄 301
2位	東 京 70	沖 縄 69	大 阪 78	東 京 87	神奈川 286
3位	神奈川 65	福 岡 52	東 京 77	沖 縄 71	東 京 285
4位	大 阪 60	東 京 51	静 岡 75	埼 玉 60	大 阪 285
5位	福 岡 60	神奈川 41	兵 庫 75	大 阪 54	福 岡 214
6位	北海道 51	兵 庫 41	沖 縄 57	福 岡 54	埼 玉 188
7位	埼 玉 35	埼 玉 37	埼 玉 56	愛 知 53	兵 庫 188
8位	静 岡 31	熊 本 28	千 葉 48	広 島 52	静 岡 181
9位	千 葉 30	北海道 27	福 岡 48	静 岡 48	千 葉 140
10位	兵 庫 27	静 岡 27	広 島 47	兵 庫 45	北海道 136

リハビリサポート・ネットワークが09年度報告書

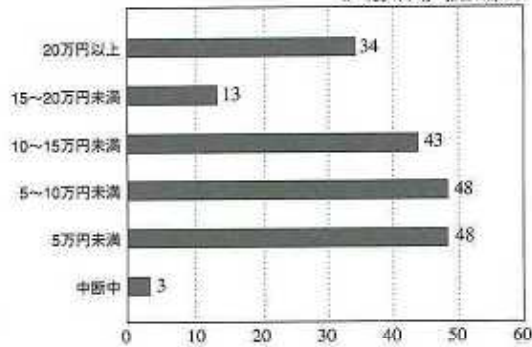
■1週間に遊技する頻度 (表2)

n=191 (不明・拒否は除く)



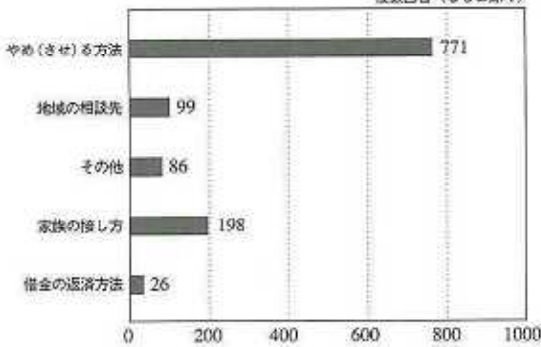
■1カ月に使う金額 (表3)

n=189 (不明・拒否は除く)



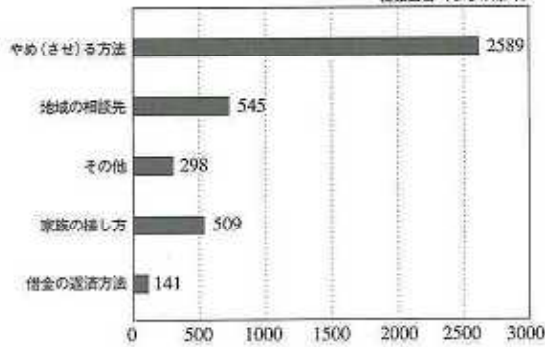
■相談者の知りたい内容 09年度 (表4)

複数回答 (なしは除く)

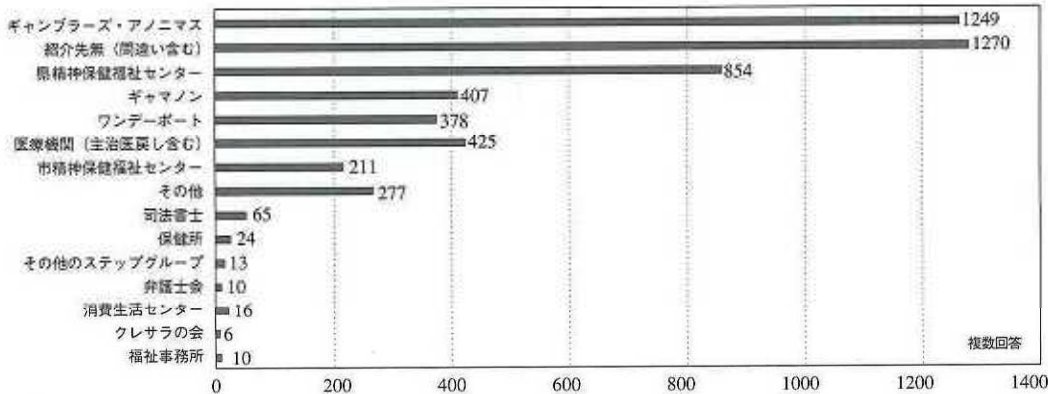


■相談者の知りたい内容 総計 (表5)

複数回答 (なしは除く)



■06~09年度 紹介先の総計 (表6)



浮かび上がる問題解決の難しさ
求められるサポート体制の充実化

コーラーからの相談内容(知りたい内容)については「やめ(させ)る方

法」が771件と圧倒的に多く、次いで、家族が問題を持つ本人に対してどう接したらいいのかを問う「家族の接し方」が198件が続いた(表4)。06年度からの4年間の総計データを見て、知りたい内容として「やめ(させ)

る方法」が突出して多いことが分かる(表5)。また、電話相談の結果についてであるが、全相談件数1305件の65%にあたる848件が、相談者が利用できる地域の相談機関を紹介している。相談機関としては、本人の相互援

助グループ「ギャンブラーズ・アノニマス」や精神保健福祉センター、家族の相互援助グループ「ギャマンソン」や医療機関が多い。なお、4年間の総計データは表6の通りとなっている。

さて、これまで報告書を振り返ってきて、NSRが依存症者とその家族の早期介入に大きな役割を果たしてきたことが分かるが、精神障害や発達障害などといった回復プログラムへの適用が難しい当事者のケースを含め、問題の本質的解決の難しさを指摘する声は依然として多い。そのため現在NSRでは、電話相談と同時に、問題を抱える人々を支援する援助職者や支援機関を対象とした研修会を積極的に開き、サポートする側の問題認識の把握とスキルアップに正面から取り組んでいる。

5月下旬に横浜市内で行われた研修会にも、依存症問題に取り組む専門家がそれぞれの立場から、当事者への介入方法や家族が果たすべき役割、回復支援施設・グループをはじめとした生活支援網の重要性等について積極的な情報発信を行っている。

ただ、前ページに記したように、悩みを抱える20代の数が増加していることも含め、ギャンブル問題の根は依然として深い。ホール団体においても、問題に繋がる危険因子の低減努力が必要なのは当然だが、パチンコ遊技に伴うリスクを社会にもつとアナウンスすることも必要なのかもしれない。